人と人　地域をつなぐ　アートがつなぐ

茅野市民館のカルチャー情報紙

わっか

VOL.01
2023.12
茅野市民館サークル
TAKE FREE



わっかなヒトビト

茅野市民館と地域をつなげるサークル情報紙「わっか」第1号の巻頭を飾るのは、〝サークル〟を表現するのには打ってつけの3人による座談会。市民館との距離感、関係はそれぞれ。でも、しっかりと〝影響〟という縁を結んでいる方々です。

――まずは自己紹介からお願いします。

五味　普段は保育士として子どもたちと遊んでいます。市民館へはたまにライブや映画に来るくらいでした。２０１４年に市民館で「縄文のうた」の詩の募集があったんです。私は小学生のころから作詞作曲をしていて、高校時代は縄文遺跡の発掘に夢中でした。興味のあることがそろったこの企画に応募してみたら、選んでいただいて。それをきっかけに、イベントに参加してみない？サポーターにならない？と今の仲間に誘っていただいたんです。このことがなければ今のようにサポーターとして関わったり、地域に演劇の楽しさを届ける活動をしていたかどうか。

向井　私は茅野駅西口でＬＡＧＯＭ（ラゴム）という古着屋を経営しています。茅野駅周辺の活性化を目指した「蔵市」というイベントもやっています。

伊藤　僕は茅野おやこ劇場という観劇団体に入っているので、覚えていないぐらい幼いころから市民館で演劇や舞台、パフォーマンスを見ています。

茅野市民館サークル情報紙『わっか』

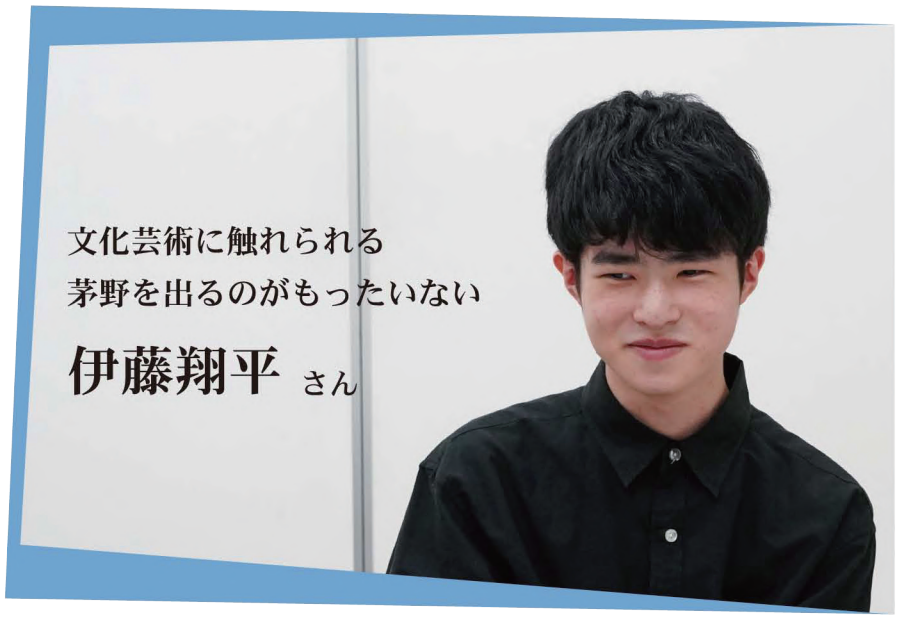
茅野市民館や、この地域で、日々生まれている多様なアートの交流。そんな「アート」を切り口に、「茅野市民館サークル」が取材・インタビューに出向き、レポートをお届けする、「人と人　地域をつなぐ　アートがつなぐ」情報紙です。





わっかなヒトビト

五味三恵さん
×
向井啓祐さん
×
伊藤翔平さん



――翔平さんは18歳、市民館が18年目なので、一緒に歩んできている感じですね。

伊藤　そうですね。美術も好きで、自分でも絵を描いているんですが、展示があるときはたまに出かけます。特に「メイメイアート」に思い入れがあります。

――「メイメイアート」は作家さんの作品に鑑賞者がタイトルをつけ、採用されるとその作品が贈られるという美術館の公募展ですね。

伊藤　はい、思い出もすごくあるんです。1回目は残念ながら選ばれなくて、次こそだれかに刺さるタイトルを付けたいとがんばったら、2、3回目は選んでいただいて。「メイメイアート」が美術と深く関わるきっかけになりました。いただいた作品は今も家に飾ってあります。

――翔平さんはこれからどういう道に進む予定ですか？

伊藤　美術大学の通信制に進む予定です。茅野が好きですし、市民館などで文化芸術に触れる機会もあるので、こちらで活動するのもいいなと思っています。



「メイメイアート」の他に、茅野市美術館のアート企画「中学生がつくる美術展」にも参加していた翔平さん。地元出身の画家、矢島史織さんと市民サポーターが訪れた部活動でのひとこま。

また母が劇団に所属していて、そのお手伝いをさせていただいているんですけど、いろいろ芸術系のことに触れられる機会も増えているので、茅野を出るのがもったいないというか。こっちにいながら、オンラインで美術の勉強もするというのが自分には合っているかなって。

向井　お話を聞いてびっくりです。私は広島出身ですが、高校時代から服が好きで、ファッションを学ぶなら外に出なきゃ、と飛び出しました。だから茅野のことが好きだとはっきり言えるのは素晴らしいと思います。

五味　反対に、都会にはもっといろいろな美術館があるし、演劇もコンサートもたくさんある。私も若いころは都会っていいなと思っていました。たまには東京へ行くのも楽しいですよ。

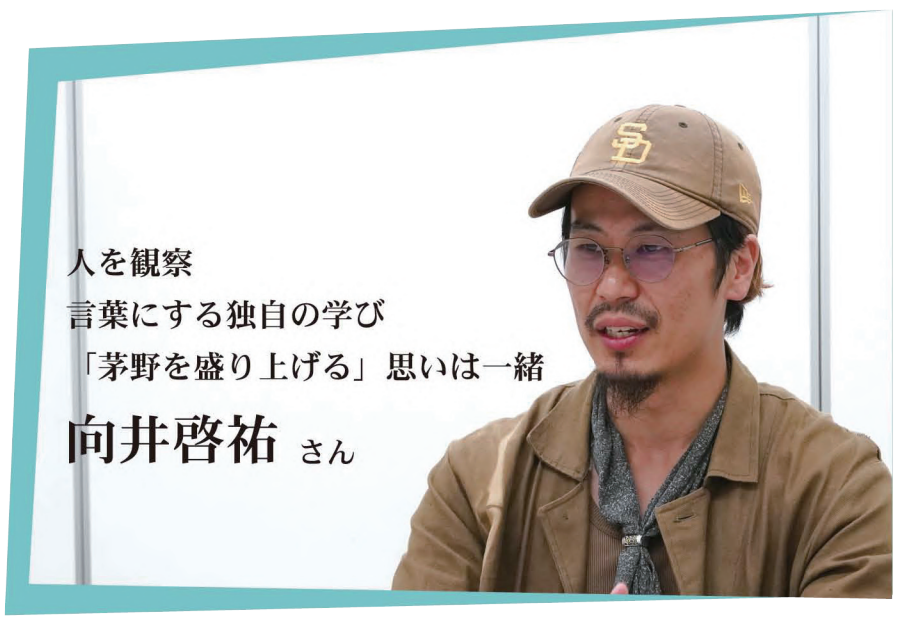
向井　それを求めて集まる人たちもたくさんいる。ファッションもそうで、私はそういう「人」のほうに影響を受けました。人を観察することで勉強したんです。それこそ渋谷駅前のスタバから、スクランブル交差点を行き来する人の写真を撮っていました。「あの人は仕事に行くのかな」「彼氏とデートかな」と想像するんです。めちゃくちゃ気持ち悪いですよね（笑）。でもお金をかけずに膨大なスタイリングの勉強ができた。それで、「おしゃれ」の意味を突き詰めて、字に起こして言語化していたんですけど、今それを茅野の自分のお店で体現しています。

――観察して言葉にするというのは「メイメイアート」とも同じです。皆さん、「言葉で表現する」という共通項が見つかりましたね。ところで向井さんはなぜ茅野に移られたのですか？

向井　東京の服屋で働いていたのですが、売り上げが重視される上っ面な接客にすごく違和感を持っていたんですよ。なぜなら私はパーソナルな接客がしたい。子どもが生まれたときに自分の仕事がかっこいいと言えるかどうか。だったら自分でやろうと思った、そんなときにたまたまこちらの男性と出会ったんです。そいつは山好きなんですけど、八ヶ岳の玄関口である茅野の駅前に人が歩いていない、君が持っている知識で、新しい服屋さんと文化をつくってほしいと声をかけてもらったんです。

――茅野は好きですか？

向井　好きですね、地元より好きです。いろいろな文化が地域に根付いていて、コミュニティがある。相談できていろいろなことが生まれたりして、めちゃくちゃ大きな家族があるという感じです。



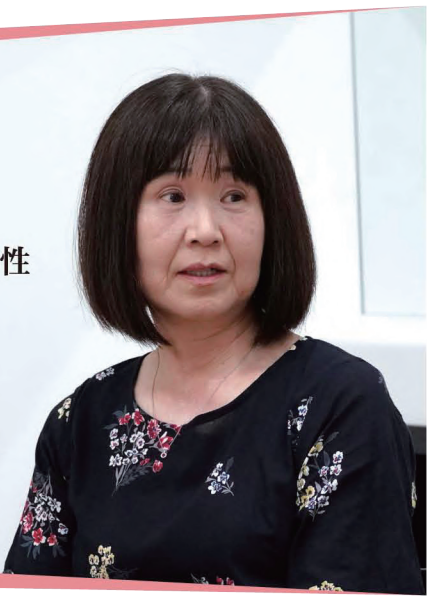
でも最初こちらに来たときは地獄というか、駅を降りたとき本当に誰もいなかった。なのに後ろで交番の人が「今日は人が多いね」なんて話してるんですよ（笑）。店を開く予定の場所に案内されたときも絶対無理だと思いました。そこから仲間をつくり、いろいろな集客方法に取り組んだけれど、めちゃくちゃ不安でしたよ。それがオープンの日にシャッターを開けたら、お客様が列をつくってくれていた。「こんなお店をつくってくれてありがとう」とお礼を言われたときには鳥肌が立ちました。そこで改めて腹を括りましたね。



２週間おきに店内のレイアウトを変えるという向井さん。「いつ店に来ても新しいものに出会ってもらえるように」というプロの矜持です。



市民館で演劇の魅力にはまった五味さん。地域のあちこちに出向いて演劇の楽しさを届ける「おでかけ隊」の活動も精力的に行っています。



人と出会い 考えが広がる
人生観が変わる「場」の重要性

五味三恵 さん

――五味さんや翔平さんのように市民館が日常にある方もいる。向井さんは一見、市民館と関わりがなさそうですが、駅を通じてお互いに影響をしあっていると思うんです。

向井　市民館さんのことはまだよく知らないけれど、茅野を盛り上げるという思いは一緒かな、と。なので、なにか関わりが生まれればいいなと、今日はここに参加しました。

五味　大袈裟な言い方をすると、私は市民館と出会って人生観が変わりました。前は家庭と職場、そのなかのルールを当たり前だと思っていた。でも市民館に関わったり、演劇に関わったりしたことで考え方も広がったし、それまでよりはるかに多くの方々と出会った。新しい世界に出会ったんです。才能あるアーティストさんやスタッフさんがふつうに来ていて、ふつうに接しているんだけど、よくよく考えたらすごいこと。そういうことを考えると、家庭と職場とは違う、もうひとつの場の重要性を感じます。誘ってもらえたからこうして関わることができているんですけど、きっと自分一人で求めていてもたどり着かなかったと思います。

――翔平さん、いろいろな話を聞いていかがですか。

伊藤　すごいです。とても参考になりました。人を観察するお話も興味深かったです。大学は通信ですけど、東京やいろいろな場所を観る必要があるということも感じました。もっともっといろいろ経験しないとなって。

――その一歩として、まず向井さんのお店でコーディネートしてもらいますか！

向井　お、ぜひぜひ！　新しい世界に触れていただけるとうれしいです。

伊藤　よろしくお願いします。

（聞き手：いまいこういち）

「茅野市民館サークル」より 情報紙「わっか」を創刊します

「わっかなヒトビト」
インタビューのひとこま。



茅野市民館は…

茅野市民館は、茅野市美術館を併設し、劇場・音楽ホール、市民ギャラリー、図書室などを合わせもつ文化複合施設。JR茅野駅とつながる立地に、建設計画から市民が直接参加してつくられ、2005年に誕生した「市民一人ひとりが主人公になれる場」です。

茅野市民館サークルは…

市民館の基本理念のなかには、「幅広い人々の交流の場」「芸術から産業にいたるまでの地域文化の創造と情報の受発信」というものがあります。人と人とのつながりから、地域の文化芸術が息づき、そのことが手から手へと届けられる。そんなことを目指し、市民館と地域をつなぎ、情報を共有するネットワークを育もうと、2022年から「茅野市民館サークル」が始動しました。

情報紙「わっか」は…

市民館サークルが発行する「人と人 地域をつなぐ アートがつなぐ」市民館のカルチャー情報紙です。

茅野市民館サークルのロゴ

つながる「輪」＝サークル
いろいろな人がつながって　自由に出入りできる

いろいろな人
手をつなぐ
つながっていく

＋

Chino Cultural Complex Circle の C

〇が〇
開いている＝誰でも入れる

紙面の構成・レイアウトもみんなで



取材した記事やコラムをどう組み合わせるか、紙面構成の確認作業。

「わっか」ではインタビューやカメラマンをしました

Q&A

Q. 茅野市民館「サークル」？ ---------- **A.** 市民館と地域がつながるネットワークのようなものです。いわゆるクラブ活動や同好会ではありません。「ひと・もの・こと」が「つながる輪＝サークル」です。

Q.「わっか」は誰がつくってるの？ ------ **A.** 第１号は市民館のサポーターとスタッフが一緒につくりました。

Q. 茅野市民館「サポーター」？ -------- **A.** 市民館では地域の人たちがサポーターとして活動しています。

わっか Vol.1　ラインナップ

●わっかなヒトビト　アートの発想で地域をつなぐ、市民館や地域に関わる人にお話をうかがいます。

●わっかなコトゴト　市民館や地域で行われているアートなできごとを取材します。

●ちょこっとマメ知識　市民館の裏側をのぞく豆知識。アートのあれこれを紹介します。

●こころに響いた表現　アート、音楽、演劇、ダンス…。興味を持つきっかけとなった表現についてのエピソード。

●わたしのまちのお気に入り　街なかのお気に入りスポットをマンガで紹介します。

●とっておきの風景　自然豊かなこの地域のとっておきを写真で紹介します。

●わっかのわ　「わっか」レポーターの編集後記です。

粋で洒落てる芸の愉しみ

小川 哲男さん



市民館ができる前、その基本構想を話し合う「茅野市の地域文化を創る会」から関わりのある小川さん。着流しにカンカン帽で、「なんて“おしゃ”な人が茅野にいるんだ」と驚いたのを覚えています。趣味の三味線では長唄、小唄の芸名を持ちます。

1976 年から始まった「茅野どんばん」。当時の市長に「茅野は広い。お互い心を通じ合えるようなことをしたい」と相談され、「顔を合わせて一緒に汗をかく」踊りの祭りをつくりました。「ほんとは三味線・太鼓のお囃子と踊り手がおんなじ場で、目と目を合わせてやる対話型にしたかったんだよ」と懐かしそうに語ります。

市民館では「伝統文化こども教室」の三味線講師や、市川染五郎（現・松本幸四郎）さん振付の「茅野カブかん囃子」などに関わってきました。縁のある邦楽家や日本舞踊家、芸妓を招いて共演した「ちょいと小粋な演奏会」は、いわばライフワーク。芸能を楽しむ“くっつけ役”をたくさん担われてきました。「芸は身を助く。友達を多くつくって、年老いて花を咲かせる」。御年96歳。矍鑠（かくしゃく）とした小川さんです。

（取材：まきまき、けんちゃん、あとまち）



お弟子さんに稽古をつけつつ、
ご自身も週１で三味線のお稽古。

誰かに届ける チャレンジ楽しむ

本田 小百合さん



諏訪東京理科大の1年生、市民館よりもひとつ年上の小百合さん。栃木から諏訪へ来たばかりです。学祭の実行委員になり、「ためになるかも」と先輩の薦めで５月、市民館の「劇場フロントスタッフ講座」に参加。「お昼の時間にほかの方とおしゃべりできたのが楽しかった」と笑います。

高校生活はコロナのなか。文化祭ではお店などは出せず、代わりにクラスで「つまようじアート」の大きな作品を制作。「来場者に楽しんでもらえるようにとつくったんですが、達成感がすごかった」と嬉しそうに話します。卒業のときに解体するまで、学校の玄関に飾られていたそうです。

高校時代はラグビー部。怪我のため活動できずにいたとき、先輩へのサプライズに動画を編集したことから音響に興味をもち、工学系の公立大学を…とこちらに進学しました。

初めて茅野で過ごした夏は「茅野どんばんに行って、踊りのお祭りっていいなと思った」。「冬の寒さが心配、でもスキーが楽しみ」とチャレンジ精神旺盛です。企業コラボのプロジェクトにも参加中。にこにこ朗らかななかに、芯のしっかりした大人の側面もみえます。

（取材：まゆたん、いちこまい、あとまち、ごろん）



市民館の「フロントスタッフ講座」に参加する小百合さん。
客席案内体験のひとこま。

「市民館との関わり」といっても十人十色。催しものを行う人、参加する人、見にくる人。古くからの人もいれば、初めましての人もいます。今回は、そんな関わりのさまざまな方々にお話をうかがいました。



風情ある店内は琥珀色。
コーヒーの氷はアイスピックの手割りです。



「MIX」のメンバーたちとパチリ。福島さんの周りには不思議と人が集まってきます。

駅前の変遷見守る 憩いの場

田中 和子さん



茅野駅西口、細い階段を上った 2 階にある喫茶「琥珀」。ショートヘアがお似合いの和子さんが迎えてくれます。生家の家業は金物屋。「寝かしものが多い金物屋より、朝仕入れて夜現金に変わる商売がいい」と一念発起し、喫茶店を始めました。昭和 50 年 12 月の開業以来、まちの人の憩いの場であり続けています。

かつての茅野駅周辺は大にぎわい。電車には人が鈴なりで、映画館は３館あり、土曜にはオールナイト上映も。映画のあとのお楽しみはラーメンやソースカツで、多くの若者や家族連れが行き交ったそう。ここで育ち駅周辺の移り変わりを見てきた和子さん。「ゴタゴタしていた分、いきいきしていたね」。市民館ができてからは、ギャラリーで展示を観たり、コンサートを楽しんでくださっているそうです。

落ち着いた声色に軽妙なトーク。カウンターに立つ姿はシャンとしています。今年、誕生日の記念に、神宮寺から守屋山に登頂したというから驚きです。秘訣は週 3 回、運動公園へのウォーキング。「街なかにリスが暮らすような林があるのは茅野ならでは。自然は豊か、文化面はこれからだね」とにっこり。

（取材：まきまき、なしえだ、おみつ、あとまち、けんちゃん）

アートの“大樹”育てたい

福島 徹さん



諏訪で育ち、今は茅野市玉川に暮らす画家。地域のアーティストが企画する「まちの展」や、茅野市美術館の公募展「メイメイアート」などに参加。そこで地域や県外のアーティストと繋がりができたといいます。2022年にアートのNPOを仲間と立ち上げ、ここ２年「おかやアートフェスティバル MIX」を手がけています。

子どものころ、思いがけないところで手渡された一枚の絵。それが「今思うとアートとの出会いだった」。大人たちが訳のわからないことをしていたことが記憶に残っているそう。「ちょっと変なものがあるなって気づくだけでもきっかけになる」。そんな思いを持って、アートと出会う体験の場をつくっています。

遊学したイタリアで出会った“アルボグランデ”という言葉をNPOの名前に冠しました。意味は“大樹”。「つくったものがすくすく育って大樹になればいい」。庭師でもある福島さんならではと感じます。「このカップもペンも、みんな何かしらデザインされている。アートも身近にある。もっとカジュアルなものにしたい」とおっしゃっていた言葉が印象的です 。

（取材：おみつ、あとまち、ぜんだ）



「ダンスで笑顔」が喜び

藤田 めぐみさん

茅野や岡谷で年少さんから高校３年生まで、子どもたちにダンスを教えている、めぐみ先生。小学生のころから地元のスタジオに通い、ジャズダンス、ヒップホップダンスに熱中。そのままインストラクターになったそう。保育士の夢もあったが、「今やってることも結局近いですね」と笑います。

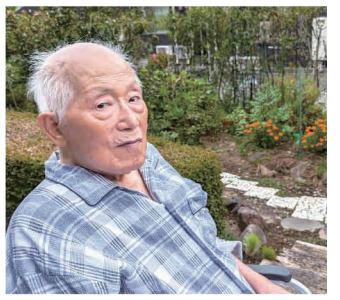
「地域の人に知ってもらいたい」と、地区の集まりに参加する一方、「大きなステージに立たせてあげたい」と、市民館のマルチホールで年１回、ダンスイベントを開いています。地域にゆかりのある人にも声をかけ「一緒に盛り上げたい」と、この11月で３回目。ロス留学時、表現力の差に驚いたが「自分にスポットライトがあたることで、表現したい気持ちが沸いてくるんじゃないかな、と」。

上手になる、プロになる指導より「わたしは安心してダンスを楽しめるフォローをしたい。“ダンスのおかげで元気”“自分の居場所”っていう子たちがいるから」。踊れる場所があること、支えてくれる人がいることに感謝。「ダンスで周りの人が笑顔になっているのを見るのが一番好き」な、３人のお子さんとダンス教室の子どもたち、子沢山のお母さんです。

（取材：あとまち、まゆたん、ふみふみ、けんちゃん、よしたけ）



「こどもまつり」でのダンス発表を見守るめぐみさん。一緒に「グー！」



自然が好き スケッチが好き

竹村 一久さん

洋画家の故・篠原昭登さんが、生まれ育った茅野に戻って開いた絵画教室に参加。そこからずっと絵を描いています。茅野市美術協会の役員をしていたことから市民館の建設に関わり、美術館サポーター「美遊com.（ビユーコム）」でも世話役を務めてきた竹村さん。「いっきゅうさん」の愛称で慕われています。

各地を旅してスケッチするのが楽しみ。篠原さんを師に画友が集った「火耀会」の仲間たちと出かけたり、妻の美保子さんともあちこちまわったそう。火耀会のスケッチ会では「篠原先生が先頭になって魚捕り・きのこ狩り・バーベキューのお楽しみがあった。絵の先生というより農家のおじさんとしか見えない姿だった」と懐かしむ。「いっきゅうさんのお庭でもみんなで焼肉会やったよね。まとめ役でね」とは長い付き合いのサポーターさんの弁。

霧ヶ峰や七島八島などの自然が好き。「スケッチする場所がたくさんあるから」と、根っからの絵描きです。今年７月の「茅野市美術展」では、入笠山を描いた作品が奨励賞に。これからも、美術館でいっきゅうさんの絵を楽しめますね。

（取材：あとまち、もりぞう、ぜんだ、さちこ）



旅先ではいつもスケッチ。
写真は美保子さんと出かけた黒部ダムで。

●このひと ●あのひと ●いろいろなひと

わっかなヒトビト

参加する人 みんなが“主人公”

八ヶ岳マウンテンミーティング

茅野駅東口につながり、茅野の玄関口でもある市民館。近年「地域の魅力を、何より地元のみなさんにつなげたい」と、市民館を活用してくださる方が増えています。八ヶ岳の魅力を発信する「八ヶ岳マウンテンミーティング」もそのひとつです。集まった人、参加する人が“主人公”というこのイベント。市民館の理念「一人ひとりが主人公」と同じです。そんな企画を牽引した実行委員の方々です。

（取材：あとまち）



菊池 大介さん

原村出身の菊池さん。デザイン制作の仕事をしており、「八ヶ岳の麓でデザインの力を使っていろんなお手伝いをしています」。山好きのつながりから猪熊さん、中村さんと知り合い、八ヶ岳の魅力を発信する場をつくろうということに。「持っているものがお互い違ったので『じゃあ一緒に』となりました」。

「星空の映画祭」など、みんながボランティアで実行することには経験値がある菊池さん。「対価はお金じゃなくて、つながり。地元のいいところを発信することでモチベーションが上がる。仕事とはまた違った部分で楽しいですね」。

イベントの完成度を高める方向性だけでなく、「地域でこういうことができる輪を広げていきたい。地元の人が、地元発でやっているっていうのが良さだと思うので」。地域との関わりをもってきた菊池さんならではの視点です。



中村 敏久さん

仕事の都合でこちらに移住した中村さん。山岳写真家の菊池哲男さんとの出会いから山に興味をもち、山にまつわる仕事に。今は山岳エリアのITサポートなどをしています。

ある時、茅野駅の通路でシュラフをひいて寝ている人たちを見かけたそう。「いわば“ステーションビバーク”。案外楽しんでるんだなって思った」。朝、西口のバス乗り場に直行して「そのまま山に行っちゃうのはもったいない」と思ったといいます。ワークラボ八ヶ岳に立ち寄る人に声がけをするうちに、猪熊さん、菊池さんともつながり、このイベントを実行することになりました。

企業型のイベントはたくさんあるけれど「やりたい人が自立してやっていくのがいい。そうすると、また人と人がつながりますよね」。世代、性別を越えてつないでいくと、きっと楽しい成果が生まれる。「もっといろんな可能性がある」と、これからを見つめています。



猪熊 隆之さん

実行委員長の猪熊さん。大の山好きで、山岳専門の気象予報サービス会社を運営しています。４年前、市民館のイベントスペースを見て「クライミングウォールがあったら」と相談したところ、「イベントをやって設置してみては」と提案を受けたこともあり、マウンテンミーティングを始めました。

たくさんある山岳系のイベントのなかでも「お客さんと一体感のあるものが面白いと感じてきた」。これまでの山岳フェスとは違うやりかたで、人と人をつなげたいと思ったといいます。

今回も「みんなが楽しそうにしていたのが一番うれしかった」とのこと。「皆さんのボランティア精神に支えられて、ただただ感謝」。今度は「山の行動食を持ち寄るとか、参加者自身が交流できることができたら」と、人と人が関わり合う楽しさに思い巡らす猪熊さんです。

次ページ【わっかなコトゴト】で、「八ヶ岳マウンテンミーティング」のレポートをご紹介しています。

●このこと ●あのこと ●いろいろなこと

わっかなコトゴト

市民館や地域で行われている
アートなできごとを取材しました。

駅前から発信 地域につなげたい

茅野市民館ショーケース2023 八ヶ岳マウンテンミーティング

八ヶ岳の魅力を、玄関口の茅野駅前から発信する「八ヶ岳マウンテンミーティング」。開山祭直前の5月28日、市民館を会場に開かれました。2019年にスタートした八ヶ岳山麓の山好きグループによる手作りの山岳イベント。コロナ禍でのオンライン実施を経て、顔を合わせて行うのは4年ぶり2回目となり「実感としては、一からの取り組み」とのこと。実行委員会が主体となり、市民館がサポート役となって実現する「茅野市民館ショーケース」事業として行われました。

メインの催しはトークセッション。駅を出てすぐのイベントスペースを会場に、八ヶ岳山麓での「場づくり」や、山小屋発のドキュメンタリー映像制作、それに山岳写真家を迎えた3つの対談がありました。



中庭では「ひと・もの・こと」に出会うマーケット。



新しい形の林業を実践している小池耕太郎さん、蔵を改装したギャラリーカフェを営む金成昌美さん。茅野で「場づくり」をするおふたりのトーク。



前夜からテント泊した山好きの皆さんもいました。

中庭では、地域の良さを生かしたショップや、山の魅力を発信するブースによる「マーケット」も。ここ数年、新しく地域で活動を始めた人たちに積極的に声をかけたそうです。八ヶ岳と茅野駅をつなぐハブづくりに挑戦する人、手仕事で暮らしを楽しむ提案をするカフェ、森で楽しむハンモックのPRも。野点のお茶会や、応急手当てのワークショップもあり、山好きだけでなく、さまざまな興味の入口から参加する人の姿もみられました。

苔むす森から険しい岩場まで、様々な表情を持つ八ヶ岳。ファンが多く、すてきな山小屋もたくさんあるけれど、意外と地元では知られていない面も。「八ヶ岳の魅力を地域につなげる」、そんな思いが伝わってきました。

（取材：あとまち）

蔵市

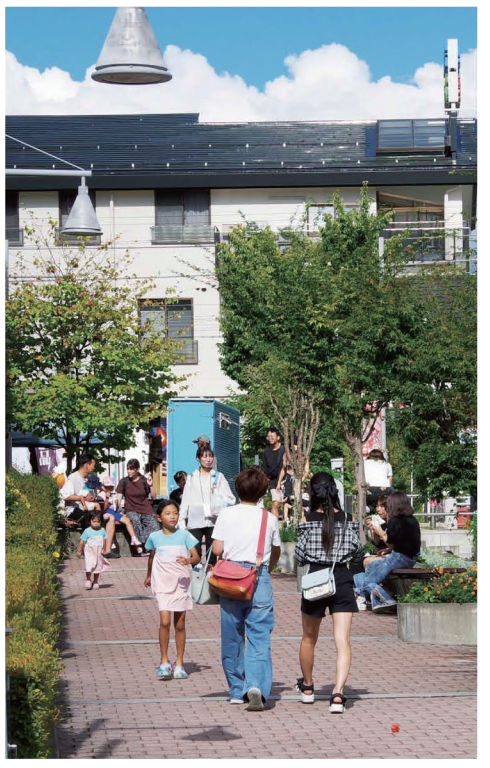
市民館と線路をはさむ、茅野駅西口周辺を会場にした「蔵市」。「昔と今」をテーマに、地域のお蔵に眠っている古物に光をあて、周囲の店舗や団体とも連携し、一帯に人通りをつくろうという取り組みです。

主催するのは、西口の空き店舗をリノベーションした古着店「LAGOM（ラゴム）」。お店を構えてから、地域の人に「蔵にある古いものも回収できる？」と訊かれることが度々あり、回収に出向いて見つけた掘り出し物を、野外で販売してみようと思い立ったそうです。「来た人に駅周辺のお店や風景を楽しんでもらえる。やってみたら、その後も人の歩く姿がみえ始めたんです」と代表の向井啓祐さんはいいます。

4月末のプレ企画を経て、本格的に実施した9月9・10日には、弥生通りの一部を歩行者天国に、古道具のブースや子どもの遊び場を開設。周辺にはキッチンカーや商店街の出店が並び、本や子育てに関する連携イベントなどもあって、周囲を巡ってゆっくり過ごせるようになっていました。

小さい子ども連れや学生など、若い人の姿も多かった今回。「やっていいよ、と周りの皆さんが助けてくれるおかげ。まずは3年、やりたいです」。

（取材：あとまち、おみつ、けんちゃん）



旧甲州街道と、駅前縄文公園付近の弥生通りを結ぶ小道。行き交う人、ひと休みする人、なごやかな光景です。



今回、古道具の購入はオークション方式に。「フリマという意識はなくて。わくわくしたい、楽しみたいんですよね」と向井さん。

PICK UP

「足で、からだで」この地を掴む

森下真樹×石川直樹 みちのちのダンススケープ



振付家・ダンサーの森下真樹さんと、写真家の石川直樹さん。ふたりのアーティストが茅野・諏訪地域の風土や歴史を深掘りし、未知の魅力を発見する「みちのちのダンススケープ」。茅野市民館がホストとなるアーティスト・イン・レジデンスの取り組みで、2021年から始まり今年が締めくくりの3年目です。八ヶ岳、諏訪湖、御柱祭など、「足で、からだで」この地を掴んできました。

メインのリサーチとなった八ヶ岳登山では、高所恐怖症で涙ながらに歩みをすすめ、主峰全山を縦走した森下さんと、ヒマラヤなど8000m級の山々に挑戦するなかで、「八ヶ岳は癒しだった」という石川さん。これまでトークイベントや中間発表で、それぞれの八ヶ岳のお話をうかがってきました。

この冬には、森下さん・石川さんがリサーチを重ねて出会った様々な人や自然、物事の記憶をもとにした創作発表を、市民館で行います。ダンスと写真と冒険の、未知の茅野のランドスケープ。どうぞ楽しみにお待ちください。

観る、感じる、表現する 発想 のびのびと

おでかけ美術館

地域ゆかりの現代作家を特集した、茅野市美術館の企画展「ＣＯＮＴＡＣＴ―情景をひらく　池上武男・山内悠・五味謙二・橋口優」。会期中の８月25日、茅野市の北山小学校で「おでかけ美術館」を行いました。展示作家と学芸員・美術館サポーターが出向き、作品を持ち込んで「対話による作品鑑賞」を行い、さらに作家の皆さんと造形表現を体験する内容です。１～６年生全員と先生も一緒に、学校まるごと美術を楽しむ時間をもちました。

（取材：あとまち、まゆたん）

わたしの視点

「対話による作品鑑賞」では、まずサポーターがファシリテーターになって進め、２回目は先生方にバトンタッチ。その、先生たちのファシリテートが熱くて、子どもたちもノリノリ。一回経験したあとだったことと、ふだんの関わりがあるからかな、みんな鑑賞するのがとても楽しそうでした。

鑑賞のとき、作家の皆さんと「どんなふうに描いたか、つくったか、撮影したか」という話をしたからかもしれないけれど、そのあとの表現の時間は、楽しみながらもすごく真剣に取り組んでいて、子どもたちの吸収力にびっくりしました。

わたしが同行した写真のグループでは、子どもたちの撮ったものは本当に独創的。撮った写真を観ながら「自由に発言していいんだよね」と、いつのまにか対話型鑑賞会になっていました。子どもたちの発想は無限大！そんなことを感じました。

（レポート：まゆたん）







体育館に作品を持ち込み、対話による作品鑑賞。「どんな風に見えるかな？」

鑑賞のあとは、作家と一緒に絵・写真・粘土の造形といった表現活動。写真のグループは、自分が見つけた「すごい！」を撮影してベストショットを選び、写真家・山内悠さんと一緒にみんなで観ました。

「対話による作品鑑賞」とは

作品から受ける印象などを自由に話し合いながら、鑑賞を深めていく方法です。その際、鑑賞の進行役として意見を引き出したり、まとめたりするのが「ファシリテーター」。今回は、まずサポーターがファシリテーターとなって子どもたちが作品を鑑賞し、次に先生方がファシリテーターとなり、子どもたちと別の作品を鑑賞しました。

おかやアートフェスティバルＭＩＸ２０２３

８月４・５・６日の３日間、多種多様なアートが岡谷に集結した「おかやアートフェスティバルＭＩＸ」。「すべての自己表現がアートだ」を掲げ、市内５会場をつなぎ、展示やパフォーマンス、ワークショップ、トークイベントなどが繰り広げられました。市民館・美術館で顔を合わせる方々も参加していたこの催し。２年目の今回は、地元を中心に64組、２００人以上の表現者が参加したというから驚きです。

「芸術祭じゃなくて〝フェス〟。地元にもアーティストはたくさんいる。アート好きだけが反応するものじゃなく、もっとフランクに興味をもってもらう一歩になれば」と主催のＮＰＯ法人アルボグランデ代表・福島徹さん。展示スペースでは作品販売もしていて、「こんな表現をしている人たちがいるんだ」という「アートの見本市」の様相も。子ども連れの来場者も多く、作家と直接話をしている光景も印象に残りました。

アートの面白さって「ちょっと変なもの、違和感、不協和音。相容れないものを同じ空間に置いてみるとカチャっと合うときがあって、どこかで調和していく。そういうところがぼくは好きですね」と福島さん。《ＭＩＸ》も、不慣れな部分や「もっとこうしたほうがいい」という部分もあるのだけれど、それを踏まえて「まず10回はやろうというアドバイスをもらった」といいます。

アートを地域に醸成、浸透させるには、いろいろ磨いていきたい部分もあるとのこと。「ゆくゆくは市民館でもやれたらいいなと思っています」と、うれしい言葉もいただきました。

（取材：あとまち、わかさん、ぜんだ）



岡谷美術考古館前。
通りに面した屋外に、目を引く大きなオブジェ。





メイン会場では展示、パフォーマンス、ワークショップと、多彩な表現が集まっていました。

ちょこっと マメ知識

知られざるエピソードいろいろ！

美術品の運搬

私たちの生活にとって今や当たり前の「運搬」というシステム。美術館に展示される作品たちも、保管場所から展示室へ、そして展覧会の期間が終わればまた保管場所へと人知れず運搬されています。

とにかく気をつけるのは、作品が傷ついたり壊れたりしないこと。作品ごとの状態や特性をしっかり把握してから、学芸員と輸送業者が協力して梱包します。美術館同士で作品の貸し借りをする際には、双方の学芸員の間で注意事項を確認。場合によっては事前に輸送業者と作品の下見を行い、専用の箱を新たに作ってもらうこともあります。

作品に触れる梱包材にも注意と工夫が必要。作品保護のためによく使われる梱包材の一つに、「薄葉紙（うすようし）」と呼ばれる梱包用の紙があります。とても薄く柔らかいため、額に入っていない絵画の表面なども傷つけずに保護できるほか、袋状にした薄葉紙に綿を詰めた「綿布団」と呼ばれる形にして箱の中の空間を埋めたり、ねじると強度が出るため紐状にしたりと様々な形で作品の保護に役立っています。

また、美術品にはそれぞれ適した温度・湿度があり、作品の性質によっては移動中もできる限りそれを維持しなくてはなりません。輸送業者の「美術輸送車」は、衝撃から作品を守るエアサスペンションに加えて空調設備もきちんと付いた専用車両。運転にも気を遣いながら、目的地まで安全に運んでくれます。

普段、展示室にきちんと並んで照明に照らされた姿しか目にしない美術品。その展覧会の裏には、専門家たちの「運搬物語」があるのでした。

（文：しろわいん、教えてくれた人：美術館長）

こころに響いた表現

忘れられない水墨画

小平久美子さん

文：しろわいん　絵：つぼい



「これはなぁ、『とうはく』さんの絵でしてな」

もう50年以上も前になるだろうか。京都、大徳寺の真珠庵。案内に出て来てくれた女性は、物柔らかな京ことばでそう言った。茶道部の活動の一環として、普段は非公開となっている内部の見学を申し込んだ旅先での出会いだった。

目に飛び込んできたのは、まっすぐな力強い墨の線だ。斜めに一筆、左下へ一筆、右下へ一筆。きっとその筆遣いを音にするなら「シャッ！シャッ！シャッ！」。切り立った岩場の風景を、「とうはくさん」は迷いのない三つの線だけで表現していた。

あの岩を描いた「とうはくさん」とはどんな人だろう。お寺ゆかりの人だろうか。帰ってからも、何だか無性に気になる。インターネットなんてまだなかったから、とにかく図書館へ向かった。

――長谷川等伯。真珠庵の女性が「とうはくさん」と親しげに呼んでいた人物は、何百年も昔、豊臣秀吉の時代に生きた日本画家だった。

「等伯さん」を知ってから、もっと図書館や本屋を回って資料を探した。あのとき見た絵を載せている本はなかったが、やっとのことで本屋の棚の中に見つけた「東洋美術選書」シリーズの『等伯』は、大切な宝物だ。

絵師として生きる道を求め、故郷の石川を離れて京都を目指した長谷川等伯。残された作品は今も、各所で丁重に保管されている。あの女性は、「等伯さん」の絵と一緒に生きているのだろう。

そんなことを考えた。

しばらく時が経ち、結婚して茅野で暮らしていたある日のこと。掲示板に並ぶポスターの中に、「あの名前」を見つけた。東京国立博物館で、長谷川等伯の展示がやっている！

憧れの「等伯さん」の企画展。ひときわ目を引いたのが、国宝「松林図屏風」だった。霞の中に浮かぶ松の姿は、遠くから眺めると静かにたたずんでいるよう。しかし近寄っていくと俄然、印象が変わる。まるで荒れ狂う動物のように、勢いよく走る墨の軌跡。こんな松の描き方があるのか！この絵に出会えただけで、もう心の底から幸せだった。

東京国立博物館では、毎年一月に「松林図屏風」が展示される。大理石の階段を上って、右に曲がって…展示室への順路も覚えるほど、何度も会いに行った。その前に立つたび、あの言葉が聞こえる。

「これはなぁ、等伯さんの絵でしてな」

わたしのまちのお気に入り

Chino Wa!

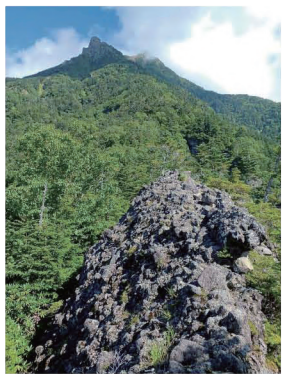
～茅野市宮川 上川橋～

絵：つぼい　エピソード：あとまち



【上川橋】旧上川橋は1935（昭和10）年建造。当時を象徴する貴重なデザインの「親柱」は新しい上川橋にも復元され、橋のシンボルとして今も愛されています。マンガのエピソードは、市民館と街なかを結んだアート企画『パノラマチノラマ』（2014年）より。福祉の取材や様々な人との交流をもとにした演劇・語り・歌・ダンスを巡るツアーのひとコマです。







とっておきの風景

八ヶ岳主峰への道

文：わかさん

写真提供：日本山岳ガイド 豊田嘉英さん

八ヶ岳は本州の中央部に位置し、南北 30 ㎞、東西 15 ㎞にわたる独立峰。岩稜の南八ヶ岳と緩やかな北八ヶ岳に区分けされ、昔から諏訪の人たちに神体山としてあがめられている。

最高峰の「赤岳」は標高 2899m。山頂近くの山肌が酸化鉄のため赤褐色を呈することから名付けられた。頂上へのルートはいくつか有るが、いずれも険しい岩稜のルートばかり。今回のルートは天狗尾根、小天狗大天狗岩経由の厳しいコースだ。

看板には「地獄谷入口」とある、いかにも怖そうな表示。大天狗岩を遠くに仰ぎながら気持ちよく急登に継ぐ急稜を頑張る。大天狗岩の上に出ればこの展望！　至福の時を味わったら、頂上まではもうひと頑張り。

編集後記　わっかのわ

●初めて取材に同行し、写真撮影を担当。被写体をできるだけ綺麗に、活き活きした表情で捉えるか、に集中しました。自分について話すのも、相手の話を聞くのも、リスペクトがあるとお互いに気付きが得られ、「大事にしてきたものが何か？」が発見できたと思います。初対面同士の緊張から始まった対話が、多くの共感に満たされた時間になる、心地よい体験でした。（けんちゃん）

●藤田めぐみさんのインタビューに同行しました。今の時代にとっても大切なことを進めていらっしゃる、すごい素敵なことが起きてる！と、魅力に引きこまれっぱなしの“お宝”トークでした。この様な機会でなければお聞きすることのなかったであろうお話。とてもありがたいなと思いました。（ふみふみ）

●茅野市民館と地域をつなぐ、市民の手による情報紙「わっか」の創刊号。2022年から1年の準備期間を経て、ようやく皆さんのお手元にお届けできます。どんなふうに読んでいただけるか、どきどきそわそわ。次号は2024年春頃を予定しています。お楽しみに！（まきまき）

茅野市民館サークル情報紙　わっか　Vol.1
2023 年 12 月発行

制作：茅野市民館サークル
発行：茅野市民館指定管理者 株式会社地域文化創造

〒391-0002　長野県茅野市塚原一丁目 1 番 1 号
TEL 0266-82-8222
FAX 0266-82-8223

茅野市民館サークル
Chino Cultural Complex Circle
http://www.chinoshiminkan.jp/circle/

「茅野市民館サークル」は、茅野市民館・茅野市美術館をはじめ、地域の文化芸術に関する情報を共有し、人と人とのつながりから地域の文化芸術活動が活性化することを目指し、2022 年 4 月に始動した取り組みです。

